

アンマンの今～ザハラーン通り

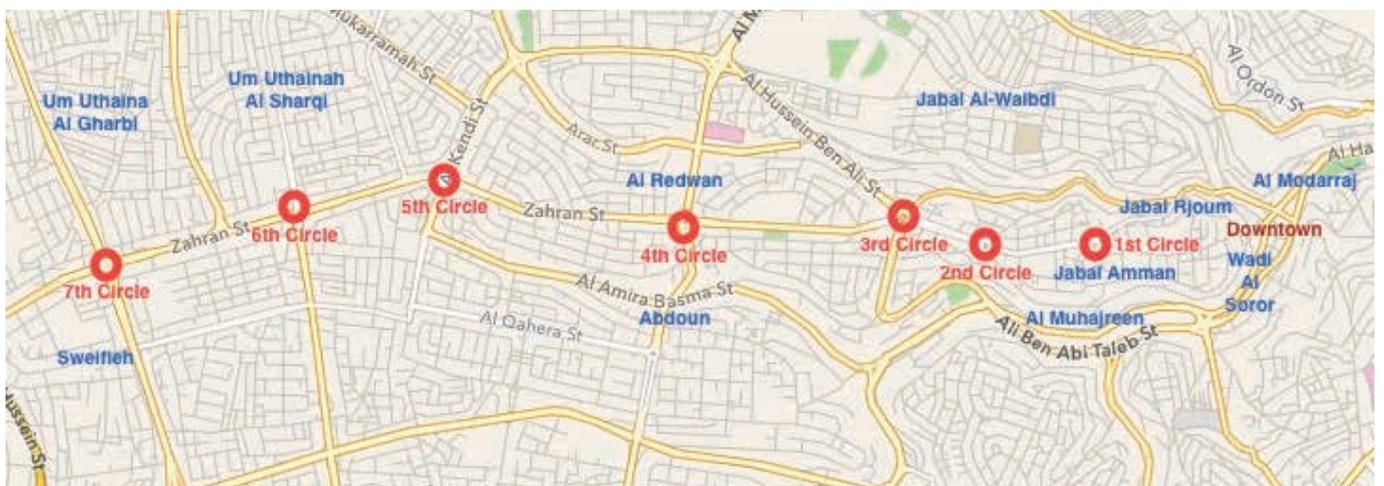


CENTRAL TRADE & AUTO CO.
SALES AND MARKETING DIRECTOR 浅山 明人

アンマンは、丘の上に発展してきた。元々7つ、今は19以上の丘にまで広がった。海拔約800mで、夏は涼しく、冬季には積雪。その歴史は古く、新石器時代からの定住地で、聖書にもアンモン人の都ラバトとして言及される。

小生はどうやら、この都市と細からずの縁で結ばれているようだ。駐在2回、通算12年住んだ。最初の接点は、カイロ研修生時代の84年秋の研修旅行だった。ヨルダンに滞在後、シリアに抜けた。カイロやダマスカスは混沌としていたのに対し、アンマンが随分明るく魅力的に見えた。90年代半ば、オスロ合意後、アンマンを起点にしてパレスチナ復興・ヨルダン支援に関わった。当時、ヨルダン渓谷を下り、死海を左手に見ながら、ちょっと緊張しながら、何度もヨルダン川を渡った。ヨルダン川西岸に入るなら、是非、ヨルダンからの陸路をお勧めしたい。2003年のイラク戦争直後からは7年半アンマンに駐在した。治安の問題で、イラク案件の多くはアンマンで協議された。今や、このイラク復興バブル時が懐かしい。あれは一つの酒とバラの日々であったのだろうか。その後8年を経て、19年にアンマンに戻った。今は日系自動車メーカーの総代理店に勤務している。

今回は、アンマンの動脈、中心部を約8kmにわたって東西に貫くザハラーン通りについて述べてみたい。この通りはアンマン理解の基本で、ここから各エリアへのアクセスを通じて、都市の歴史も理解できると思う。



[Amman's Neighborhoods & Circles Explained - My Amman Life \(wordpress.com\)](https://www.wordpress.com)

ザハラーンは旧市街から丘を上ってきたところから始まる。旧市街の町並みはとても古い。ジャバル・アンマン東側では、旧来の生活が残っている。スークの雑踏，ローマ劇場等，旅行者にも興味深いだろう。王宮も市役所も旧市街にある。



アンマン眺望

旧市街から勾配がきつい坂道を登っていくと，そこがサークル（ドゥワール）1だ。サークルは，英国のROUNDABOUTに同じ。サークル1は，他サークルに比して小さい。周辺の道も狭く，中世・近代の雰囲気を残す。一部の道路は石畳で，馬車の往来を髣髴とさせる。サークル1から東に延びるレインボー・ストリートはカフェやレストランで溢れ，古都の風情を感じることができる。名物ファラーフェル（雛豆等のコロッケ）が美味しい店も，このあたり。



旧市街



1番サークル

サークル2の周辺には，老舗インターコンチネンタルホテルや有名料理屋がある。80年代はこのあたりが一つの中心だった。街路樹が茂り，落ち着いた雰囲気でもなかなかだ。



2番サークル

サークル3は、かなり大きい。グランドハイアットやローヤルホテルなどが立ち並び、現代的風景になる。3から南にちょっと下る路地が「アジア・ストリート」だ。アジア系食材が手に入る、さしずめ「アンマンの新大久保」。実は、この十数年で東洋系が増えてきた。昨今はアフリカ系も目立つ。



3番サークルから シェミサーニ_アブドリ方面

サークル4のコーナーに首相府があり、ここから、北のシュミサーニとアブドリ、南のアブドゥーンに直結する。シュミサーニは「アンマンの丸の内」、アラブ・バンク本店もここ。その手前には現代的な総合病院、クリニック多数。中東スタンダードより、かなり高め医療水準を誇る。アブドリは、2008~09年頃からシュミサーニ東に開発されたミニ・ドバイだ。湾岸的なビルが並ぶ。アブドリ・モールはアンマン最大のモール。アブドゥーンには、サークル4から斜張橋で谷を一つ渡る。アブドゥーンはヨルダン随一の高級住宅地だ。大使公邸も多い。ちょっとスノビッシュな空気も漂う。トレンドィなタージ・モールにはブランド店多数。00年代のアンマン・ファッションをリードしていたアンマン・モールは、残念乍ら閉鎖中。

イラク人は、シュミサーニの北のガーデン・ストリートに多い。イラク料理屋もあり、マズグーフ（鯉の炙り）が旨い。



4番サークル



シェミサーニ



アブドリ



アブドゥーン

サークル5には、5つ星ホテル多数。シェラトン、フォーシーズンズに加え、ここ数年の内にセントレジス、フェアモント、リッツカールトンが完成。この周辺が、今の中心かもしれない。5から北東にワディ・サクラ、サークル5と6の間には在外公館が沢山ある。サークル5は、既にサークル状ではなく、インター・セクション化している。うっかりしていると、車はトンネルに入り、あらぬ方向へ出てしまう。5～7においては、道と地理に疎い異邦人は困惑することになる。



5から6番

サークル6には、日本関係者がよく宿泊するクラウンプラザがある。ここもインター・セクション。ツウィン・タワーは依然建設中。北上すると「アンマンの代官山」、ウナム・オゼイナで、貴金属店・レストランが多い。6の南西側が「アンマンの新宿」、サハフィーヤ。モールを含む一大ショッピングエリアだ。大概のものはここで手に入る。小さな店ではブローケン・アラビックを話す小生の顔を覚えていて、結構、個人的な対応をしてくれる。



6番サークル周辺

サークル7は、クウィーン・アリア空港に直結する。小生は、今、この7のスーパー、セイフウェイの先に住む。これまでシュミサーニ、アブドゥーン西のデル・エグバールに住んできたが、今のサークル7の裏が最も便利。自宅周辺にはカフェ、レストランが多く、高級スーパー、コスモへも徒歩でいける。

2000年代、このあたりにはまだ多くの空き地が残っていた。2010年代の開発の結果、周辺は賑やかになり、レントも急上昇した。

サークル8は、ザハラーンの終わり。役所の建物が目立つ。ただ、8のサークル・交差点設計には、些か首を傾げざるを得ない。複雑怪奇で、どの車線に入るのか戸惑うこと頻り。この先はヨルダン渓谷に下っていく。

サークル8を北上すると、メッカ・ストリートに繋がる。周辺には、「ヨルダンのシリコンヴァレー」、ビジネス・パークや仏カルフルが入るシティ・モール、王立公園等がある。公園内の王立自動車博物館は華麗なコレクションを誇る。ハシミテ王家は歴代、車好きだ。これらのさらに北に、高級住宅地ダップークができた。道も広く店舗が急増中。

パレスチナ難民キャンプのサルトはさらに北に位置する。サルトも、長年の居住でもはや、ちょっと見では全く難民キャンプには見えない。

ヨルダンは、移民大国だ。パレスチナ・レバノン・イラク・シリア等周辺国からの流入が絶えない。イラク人の一部は、母国に戻ったが、居残り組も多数。パレスチナ人を入れると住民の多くが移民・難民と言える。アンマンは、政治的混迷が長引くレヴァントに、

ある意味奇跡的に浮かぶ平和都市だ。因みに、漢字でも「安曼」と書かれる。

サークル8の西は、もうヨルダン渓谷だ。死海には、サークル7からのエアポートロードを南下、その後、右折する。ヨルダン渓谷の緑を愛でつつ、小一時間。最近、このエアポートロード周辺にも多くのフラットができてきた。アンマンは今、南に向けて拡大を続けている。この先、この道路沿いの丘陵・農地が開発の中心になっていくだろう。



ヨルダン渓谷

アンマン東方にはザルカがある。人口百万にも達するかという、砂漠にあるアンマンの衛星都市だ。ここからは、イラクとシリア国境への幹線道路が伸びる。近年はザルカからアンマンに通う人々も増えた。

小生のアンマン居住は13年目に入った。海外は長いが、ここでの滞在が人生で最長となった。略々、第二の故郷と言ってもいいだろう。ザハラーン通りも含め、この都市には歴史を超えてきた品格があると感じる。建物の多くは、白い砂岩で建てられ、陽が当たると眩い。都市としての規模感もちょうど良いし、都市システムも破綻を来してはいない。この都市を知らねば、おそらく小生の中東観もだいぶ違ったものになっていただろう。

車の方向指示器を出さないという「キャメル・ドライビング」が通常なので、皆さんには車の運転はお勧めしないが、基本的に地理と通りの概要が分かれば、自分で廻れる。住民も大変に親日的だ。他のメトロポリスにはありそうにない、個人の関係も濃厚だ。一度でも住んだ人間は、多分ここを嫌いにはならないだろう。小生は、この都市がずっと平和であり、着実に発展することを切に願う。

そして、これまでと同様に、何時でも小生の訪問を受け入れてほしいものだと思う。

写真はすべて筆者撮影